

チベット語古典文法學の發達について

稻葉 正 就

緒 言

第七世紀の前半に、チベット開國の英主スロンツァンガンポ王の命によつてインドへ派遣せられたトンミサンブホータは、當時隆盛を極めてゐたサンスクリット文法學に遭遇した。彼はこれを學ぶこと數年、歸國して八部のチベット語文法書を著したと傳へられる。果して彼が八部も書いたかどうかは甚だ疑はしいが、とにかく彼の著書としてチベット大藏經論部に收められてゐる「三十頌」と「性入法」の二部が現存するのである。このトンミ文法書を嚆矢として、爾來チベット文法學者の間では、インドの文法學に刺戟せられながら、かなり多くの文法學者を輩出し、また數々の著作を生み、チベット独自の文法學の傳統を築きあげるに至つたのである。

數年來、私は比較的容易に入手し得たチベット文法資料を研究して來たが、いまそれらの文法書の概要を述べて、チベットに於ける文法學の發達を概觀しようと思ふのである。

一 「三十頌」と「性入法」

チベット大藏經に收められてゐるトンミの二書の題名は

1 Lun-du-ston-pahi rtsa-ba sum-cu-pa shes-bya-ba

「文法論根、本、三十」(東北目錄四三四八)

2 Lun-du-ston-pa rtags-kyi ljung-pa shes-bya-ba
「文法論性入」(東北目錄四三四九)

といはれてゐる。この二書はトンミサンブホータ(Thon-

mi sam-bho-ta)の著作であつて、極めて簡略な偈頌で書かれてゐる。

先づ前書の方より考察を始めよう。この書に對するチベット註釋家たちの一致した分科の仕方によれば、

敬禮文 一文

歸敬偈 三偈(一偈は四句を以て構成)

本 偈 二九偈(各一偈の句數は不均等)

と規定せられてゐる。敬禮文と歸敬偈は、シツ註によれば、「性入法」と共通で書かれたものであつて、「性入法」にこれらが無いことによつて明らかである^①と述べてゐる。現存の大藏經所收の「性入法」には敬禮文と歸敬偈があるが、それに對してどの註釋家も何ら註釋を施してゐない點よりして、それは「性入法」が獨立したものである^②としての體裁をとゞのえるために後代に附加せられたものであらう。元來インドに於ては、根本論と同一宗義を敘述する造論の場合には、歸敬偈を用ひずとなすのが月稱の見解であり、また利他賢の見解でもある^③。すなはち根本論に敬禮文及び歸敬偈を設け、支分論にはそれらを用ひずして直ちに第一偈を置いたのである。いまこのトンミの二書と比較すると、「三十頌」は明らかに根本論であり、「性入法」はそれを裏附ける一種の支分論とも

いふべきものである。前掲の題名に、前者が「根本三十」と呼ばれてゐるに反し後者が單に「性入」とのみ名づけられてゐるのは、このことを示すものである。トンミがインド文法學を模倣して造論したこの二書に於て、先づこゝにインド的なる仕方が發見せられるのである。次に本偈は、どの註釋家によつても不均等な二十九偈に分けられてゐるから、それに從ふ限り題名が示す「三十」とは何を意味するかが明瞭でない。シツ註によると、普通多くは三十子音を詮はすことが主要なる論述であるから「三十」と名づけるといひ、或る者は三十の偈があるから「三十」と名づけるといふ兩論があることが知られる。これに對してシツは、前者の所説の如くならば「性入法」に於ても三十子音の性の區別などより説き及んで行くのであるから、兩書ともに三十子音のはたらしを説く點に於て相等しいものがあるから「性入法」にも三十の名をつけねばならないことになる。故に前説を採らず、偈數より名づけたとする後説を採ると述べてゐる。しからは何故に一偈少い二十九偈に分類してゐるのであらうか。それについてバコー(J. Baob)は「文法家は一般に第二偈と第三偈との間に再添後字に關する偈を補足する^④」といつてゐるが、誰の註釋書にこのような

ことが出てゐるか、淺學の私は未だ發見してゐない。もつとも二十九のどの偈の中にも再添後字_u及び_sに關して一言も觸れてゐないから、再添後字に關する一偈があつてもよいと思はれるが、しかし二十九偈に説かれてゐる總ての助辭に於て再添後字の次に連結すべき助辭、すなはち

完結助辭の to la 義助辭の tu 開攝助辭の tam

に關しては何ら説き及んでゐない點からいつて、再添後字に關しては全く除外してゐると解釋した方がよいのではないからうか。したがつてペコーの註記する説は適當ではないと思ふ。また意味上不均等に分類する註釋家の分け方によらず、全百十九句を四句一偈に等分すれば、二十九偈と三句となる。青木文教氏は、この分け方を採り最後に一句を補充して完全な三十偈としてゐられる。しかし、このように必ずしも三十といふ數にとらはれる必要はないのではないか。例へば「唯識二十頌」に於て、慈恩は「述記」の中に題名の示す「二十」といふ偈數に歸しようとしてゐるが、二十二偈と認める方が適當の如くであるのと全く同じである。一偈や二偈の過不足があつてもよいのではなからうか。そこでシツ説の如く偈數によつて「三十」と名づけたのであると理解して、普通

に呼ばれてゐる如く「三十頌」と譯すのが適當である。したがつてこれを「三十字母論」と譯す學者もあるがそれは相應しくない。

さてこの二十九偈を以て説かれてゐる内容について見るに、シツ註は詳細な科段に分けてゐるが、繁雜に過ぎると思はれるから簡單に列記しよう。

第一——六偈 母音文字と子音文字とに分け、子音

文字を七群半に分ける。更に子音文字を添後字と添前字と不添字とに分ける。即ち文字の分類を述べてゐる。

第七——一七偈 連聲助辭と格助辭とについて述べてゐる。

第一八——二三偈 不連聲助辭について述べてゐる。

第二四——二九偈 主として添後字の必要性及び添後字の用法に通曉すべきことなどの訓誡を説いてゐる。

以上を概観するならば、最初の六偈までは文法論を述べるに當つて當然なさねばならない全文字の分類であり、第二四偈より最後までは文法上の理論的な論述でなく文法を學ばねばならないといふ極めて常識的な訓誡であ

る。したがつてこの書の最も主眼とするところは第七
 —二三偈に亘る助辭についての論述である。換言すれ
 ばこの書は助辭論と名くべきものである。しかもその助
 辭は添後字一〇字を素材とする一種のモルフオロギッ
 ュな仕方で作成せられ、その用法が説かれてゐるのであ
 る。その助辭が先行語の語尾即ち添後字と關連し、そこ
 に連聲 (sandhi) を生じ、當然その連聲を規定する性に
 關する「性入法」が期待されるのである。

そこで次に「性入法」の概要を述べねばならない。先
 づ題名の *rtags-kyi hjug-pa* についでであるが、現存の
 大藏經所收のものに於ては、そのチベット語に相當する
lingavātra なる梵語題名が掲げられ、通常「性入法」
 と呼ばれてゐる。その内容を窺ふに、 *hjug-pa* といふ
 動詞は *spyor-ba* (> *shyar-ba*) 及び *shrel-ba* なる動詞
 と共に「結合する」「結び附く」の意に使用せられてゐ
 る。また *hjug-pa* のみは *affixe* 或は *être affixe* の意
 にも用ひられる。梵語の *avātra* にかくの如き意味が
 あるかどうかはともかくとして、嚴密にいへばこの書の
 題名は「性の結合(法)」「性の添接(法)」と譯すべきで
 ある。しかしいまは既に一般に「性入法」と呼ばれて知
 られてゐるからそれに従つておく。續いて内容について

分科するとこの書は

敬禮文 一文

歸敬偈 一偈(二句を以て構成)

本 偈 三六偈(各一偈の句數は不均等)

といふ構成で成り立つてゐるが、前に述べた如く敬禮文
 と歸敬偈とは、「性入法」を獨立したものととしての體裁
 をとゞのえるために後代に附加せられたものであらう。
 この書は「三十頌」の支分論といふべきものであるから
 本偈のみであるべきである。この本偈に對しても前と同
 様にシツ註は詳細な科段に分けてゐるが、わかり易く簡
 單に述べよう。

第一偈 子音文字を男・中・女・甚女・石女・無性
 の性に分類する。

第二——一五偈 添前字を男・中・女・甚女の性に
 分け、ついで添前字の添接法則及び發聲様態を述
 べ、動詞に於て添前字が過現未の三時と能受の二動
 を表はすために用ひられることを説いてゐる。

第一六——二八偈 添後字を男・中・女の性に分
 け、添後字の添接法則及び發聲様態を述べ、更に後
 續語に對して性一致及び音一致(音便)の連聲をな
 すことを説いてゐる。

第二九——三一偈 後に來る動詞などの意味によつ

て格助辭やその他の助辭の使用状態を知らねばならぬことを述べる。

第三二——三六偈 文字の必要性及びこの論を造つ

た必要性などを説いてゐる。

以上を概観するに、第三二偈より最後までは文法上の理論的な論述でなく常識的なものであることは「三十頌」の最後と同じである。したがつてこの書の最も主眼とする點は性を分類することによつて動詞の三時二動と連聲の法則とを述べようとするのである。前の「三十頌」に説いた連聲助辭は、この「性入法」によつて連聲の法則が理論的に規定せられて裏附けられてゐるのである。

トンミがインドへ派遣せられ、そこで學修したインド文法學を模倣してゐることは前述の二書を見るときには何人にも一見して明らかかなものがある。しかも彼の文法に於ては聲音を文字にすりかえ、音韻學的であるべき文法論を文字論に構成してしまつた。これは彼以後のチベット文法學全般に見られるところで、「ことば」を構成する一々の聲音を文字として理解し、文法論の構成を文字を基としてその組合せを理論的に考へて行つたのである。言はば彼は根本的にこのような誤謬を犯してはゐる

が、インド文法學を或る程度消化して、チベット語本來のあり方に進もうとして第一歩をふみ出してゐることは否定出来ない。とにかくトンミがチベット文法學に貢獻したことは、文化史上特筆すべき功績である。

註① チヤンドラ・ダス「チベット語文法書」所收のシツ註

二頁一二行目参照。

② 山口益「中觀佛教論攷」一八〇頁参照。

③ 前掲シツ註二頁七一—五五行目参照。

④ J. Bacot: *Les Slokas Grammaticaux de Thonmi Sambhoja*. p. 99註

⑤ 佐々木本「唯識二十論の對譯研究」註記の部三頁参照。

⑥ パー前掲書一〇頁註二参照。

二 「八大處根本」と「聲論」

チベット大藏經の中で、トンミの二書の次に收められてゐる二文法書がある。それは、

3 Gnas brygad chen-pohi rtsa-ba

「八大處根本」(東北目録四三五〇)

4 Sgrahi bstan-bcos

「聲論」(東北目録四三五一)

と名づけられるものである。前者の著者名は、デルゲ版の東北目録には *Ce khyi hbrug* とあり、北京版には論

に入る最初に *Ice* 論の最後に *Gi* といふ名を掲げてゐる。いづれにしても如何なる人かわからない。後者の「聲論」には著者名が全く記されてゐない。したがつてこの二書の著作年代を著者より推定することはいま困難であるから、しばらく差しおいて、内容について考察を進める。

先づ「八大處根本」といふ「處」即ち *gnas* とは、東北目錄に *pada* と當てゝゐるが、それは寧ろ「あり方」(*sthana*) としふ意ではなからうかと思ふ。それは文法上重要な根本的な八つのあり方を説く論書であるからである。その八つとは、次の如くである。

① *byed-pahi gnas* *karaka* のあり方、すなはち動詞が名詞に對する格の關係

② *bsdur-bahi gnas* *samāsa* のあり方、すなはち合成語のあり方

③ *bsgyur-bahi gnas* 續けたり分けたりシノニムに言ひかへたりしたときの意味の變化のあり方

④ *drañ-bahi gnas* 肯定或は否定などに導くあり方

⑤ *kyig-pahi gnas* 結語のあり方、すなはち聲より語・句・言説・文などに至る結合のあり方

⑥ *nam-par-dbye-bahi gnas* *vibhakti* のあり方、すなはち名詞的語尾變化—格助辭のあり方

⑦ *phyogs-kyi gnas* 分のあり方、すなはち一聲を知つて一分を知り、一聲を知つて全分を知るあり方

⑧ *dhos-pohi gnas* 存在のあり方、すなはち聲によつて存在を知るあり方

この八つの問題は、トンミの文法書とは全く關聯なしに書かれてゐる。その内容の特長として極めてサンスクリット文法的な色彩を帯びてゐる點が注意を惹く。文章は長行で書かれ、最後に偈頌で再び全體の内容を簡潔に繰り返し述べられてゐる。全部の長さは北京版で三葉(論部二二四函四〇下六行目—四三下七行目)に過ぎず、甚だ短いものであるから、註釋なくしては理解し難い。次に「聲論」を見るに、この論は二部より成り立つてゐる。

a 前半(北京版論部二二四函四三下八行目—五四上六行目)

Gnas brygad hgral-pa 「八處の註釋」

b 後半(同五四上六行目—六四上四行目)

Sgrahi nam-par-dbye-ba bstan-pa 「聲の格の説

示

すなはち、前半は「八大處根本」の註釋書である。前掲の八つの問題中の第三に關しては「理解し易い」といつて註釋せず、また第七についても「理解し盡した」といつて註釋してゐない。また第八に對する註釋は極めて簡單である。しかしその他に關しては逐語的に一々例を示して詳細に註釋してゐる。この註釋も非常にサンスクリット文法的な解釋の仕方で行はれてゐる。後半は格の八つのあり方について詳述したものである。文法學上に於て格の問題が重要であるから、特にそれをとあげて別に論じたのであらう。絶えずサンスクリットと對照しつゝ論じられてゐて、多分にサンスクリットの考へ方を書かれてゐる。例へば、前半後半を通じて格に對する見方は、七格としての七つの變化があり、それに單双複の三があるから二十一の變化がある^①。第八格はkveの如き聲と見做すから單双複の變化がない^②。故に格變化として二十二の變化があるといふ。この見方はサンスクリットの名詞的語尾變化すなはち vibhakti と同一視した考へ方によるのである。チベット語本來のあり方としては、名詞はあくまで膠着的であり、こゝに變化と稱するものは助辭として理解しなければならぬ。また kve は「お

ゝ」「おい」といふ意の間投詞であつて、第八格としての變化形でもなければ格助辭でもなく、そのことは後述するシツ註に注意するところである。このように極めてサンスクリットのな文法書である。

さてこれらの文法書が何時頃の作であるかといふ問題を解決せねばならない。それについて、この論がシツ註に引用せられてゐるのを發見する。シツ註は、後述する如く、第十八世紀前半に完成したものであるから、それ以前に作られたものであることは疑を入れる餘地がない。また「聲論」の後半の最初に八格を説くに當つて Cridhara といふ人の偈を掲げてゐるから、「聲論」の方はその人より後の著作である。しかし淺學の私には未だその人について知り得ない。今後の研究に俟つ他はない。しかし文法書の發達經過を見る上に大體の年代を推定しておかねばならない。そこで、先づチベット人著作の文法書がチベット大藏經中に収録されてゐるのはトシミの二書とこれらの論書のみである。大藏經中に收められてゐるといふことは餘り後代のものではないことを物語るのではなからうか。次に内容が極めてサンスクリット的であることは、インド文法を輸入しつゝチベット文法學を隆盛ならしめて行つた過程上の初期のものである

ことを示すものではなからうか。またシツ註には、「或る註釋書」「昔の註釋書」とのみいつて書名を擧げてゐないことが多いのであるが、「八大處云々」或は「八處註釋云々」といつてその名を掲げて引用してゐるのは相當古くよりこの書が有名であつたことを暗示するものではなからうか。とにかく「八大處根本」は勿論のこと、「聲論」も次に述べる「言語の門」や「ザマトク」より遅いものではないであらう。

- 註① 北京版論部一三四函六三下五行目参照。
 ② 同五二上五行目参照。
 ③ 同五四上八行目——五四下二行目。
 ④ チャンドラ・ダス「チベット語文法書」所收のシツ註 四頁二行目、二六頁二行目、八三頁二行目。

二 「言語の門」とその註釋書

次に我々は「言語の門」と名づける文法書を考察しなければならぬ。チャンドラ・ダス藏英辭典九九四頁に

5 Smra-bahi sgo

n. of a grammatical work by Sakya Paṅḍita
 Kun-dgañ Rgyal-mtshan (Deb. ga. 29).

と出てゐるのは、デブテルモンボ史にサキヤ (Sa-skya)

が「言語の門」といふ文法書を作つたことを傳へてゐるのであらう。サキヤとは第十二世紀末より十三世紀前半に活躍した有名な高僧を指すのであらう。サキヤの著作には全集があるらしいが、この文法書を見たといふ人を未だ聞かない。しかしこの文法書は後述するシツ註の資料となつて十數回引用せられてゐるのが見られるから、大略想像することが出来るし、チベット文法學史上、是非とも一顧を要するものである。

シツ註に引用せられてゐるのを見ると、偈頌があり長行があるから、偈と長行とを以て書かれてゐたことがわかる。シツ註に單に Smra-ssgo とのみいふ場合は勿論この書を指すのであるが、また

6 Smra-ssgo rtsa lgyrel 「言語の門と註釋」

といつてゐる場合がある。これは、「八大處根本」に對する「聲論」の如く、別にこれに對する註釋書があつて、それを指すのであらう。

またシツ註に、この「言語の門」とその註釋書が十數回引用せられてゐるのは「三十頌」の註釋の中に於てであつて、「性入法」の註釋の中には殆んど引用せられてゐない。「性入法」第三一偈の下に三回引用せられてゐるのを見るが、第三一偈は「三十頌」に説かれてゐると

ころを再び繰り返し説く如き内容を持つた偈である。故に恐らく「言語の門」はトンミの「三十頌」に基いて書かれた文法書であるらしい。その内容は、簡略な「三十頌」が充分いひあらはし得てゐないところを餘すところなく補つてゐる。例へば、「三十頌」に説かれてゐる助辭以外に多くの助辭が實際に用ひられてゐるが、それを殆んど全部に亘つて述べてゐるようである。また助辭の用法についても「三十頌」に説かれてゐるところを詳細に述べ、更に説かれてゐない用法をも細かく分類して述べられてゐたと思はれる。後にシツ註の立派な完成を見たのは、この書とその註釋書に負ふところが非常に多かつたことが隨處に知られる。若しこの書がどこかに現存してゐて入手し得られたならば、チベット文法學の初期より完成期に至る中期の論書として興味ある諸問題を提起するものであらう。

四 「ザマトク」と「具慧生歡喜」

次に、シャル寺の人「寶法護賢」(Sha-lu-pa Rin-chen chos skyon bzah-po)の著作「すなはち

7 Bod-kyi brdahi bstan-boos legs-par-bgad-pa rin-po-chejhi za-ma-tog bkod-pa shes-bya-ba

「チベットの綴字論善説寶篋莊嚴」

といふ文法書がある(以下「ザマトク」と略稱する)。

ところが、シャル寺の譯官「法護賢」(Sha-lu Iot-sa-ba Dharmapala-bhadra)に歸せられてゐるもう一つの文法綱要書が注意せられる。それは

8 Sum-ou-pa dan rtags hjug-gi don nuñ-nur-bgad-pa blo-ldan dgat-rs-kyed shes-bya-ba

「三十頌と性入法の意味を短く解釋せる具慧生歡喜」

といふ文法書である。兩者の著者名に對し、前者には Rin-chen (寶 Ratna) が加上せられてゐるけれども、同じくシャル寺の人なることを冠してゐるから、それは同一人と見做してよいと思はれる。チョーマは彼を一四三九年生れとしてゐるから、第十五世紀後半頃に活躍した人であらう。また法護賢は、こゝに「譯官」とある點より考へて、恐らくチベット大藏經中に収録せられてゐる數々のインド文典論の翻譯官 Dharmapala-bhadra 或は Chos skyon's bzah-po と傳へる人とも同一人であることは間違ない。いま東北目錄によつて彼の翻譯書を拾つてみると次の如くである。

一、文法など言語學關係と思はれるもの

- ① Ni-mahi srin-po 著「相屬成就と名づくる論」(東北四二七八)
- ② Candragomin 著「ウナーディ註」(東北四二七九)
- ③ Rgyal-pohi lha 著「文殊師利聲明記論註八千」(東北四二八〇)
- ④ 同 書「文殊師利聲明記論第五章第二句註解」(東北四二八一)
- ⑤ Amarasinha 著「アマラコーシャ(無死藏)」の翻譯校訂(東北四二九九)
- ⑥ Subhūticandra 著「アマラコーシャ廣註」(東北四三〇〇)
- ⑦ Ratnakarasanti 著「韻律寶生」の翻譯校訂(東北四三〇三)
- ⑧ Dpal-ldzin sde 著「現説論一切明」(東北四四五三)
- ⑨ Dpal ye-ses 著「於一語人多義現説珠鬘」(東北四四五四)
- 一一、その他のもの
東北目錄四九五・一一五三・一一七三・一一七八・一四八八・一六〇六・一九〇六・二四九九・二五四

〇・三七五三・三七七一〥四四五六・三八一六?三
九一三・四一五五・四四一九・四四二一・四四三六
四四五五

以上のほかに單に Sha-lu-tsa-ba とのみあるものも彼の翻譯であるかも知れない。しかし、Dharma paṭa 或は Chos-skyon とする翻譯者名も見えるが、それは東北一六〇に Jhanitra や Dharmatāṣīla と共譯してゐるのが見られ、また Dharmabhadra 或は Chos-kyi bzah-po という名も出てゐるが、それも東北九六三に Dharmatāṣīla と共譯してゐるのが見られるから、ともに第八世紀末乃至九世紀前半の人であつて、こゝの法護賢とは全く別人であるから混同すべきではない。法護賢の翻譯書は、右に掲げたもの以外にまだあるかも知れないが、とにかく彼はインド文法學の學者であつたことは一見して明らかである。またその他の翻譯書の大部分は密教關係のものであり、當時は密教經論の輸入の盛んな時代であつたから、當然彼は密教學者であつたのであらう。密教の方面はさておき、言語關係の翻譯書の中で、③④はその著者より考へて異流の Katantra 系のものであるから、彼は Candragomin や Katantra などインド文法學全般に亘る學者であつたことがわかる。彼の著

作「ギマトク」の中に、Kalpasūtra (Kāraṇtra のチ
キート各) Candra, Paṇini, Subhūticandra, Amara-
siṃha などの名を出してゐるのは首肯し得ることであ
る。しかもシャルル寺といふのは有名なブトン (Bust-
on) が住した寺である點より考へて、法護賢はブトン系
を代表する文法學者であつたと思はれる。

さて彼の著作について一瞥するに、先づ「ギマトク」
に關しては既に B. Laufer が Studien zur Sprachwiri-
ssenschaft der Tibeter. Zamatog. (Aus den Sitzun-
gsberichten der philos.-hist. Classe der kgl. bayer.
Akademie der Wissenschaften zu München) 1898.

なる論文を發表してゐる。私は不幸にして未だ「ギマト
ク」の原文を見る機に恵まれないが、この論文に引用さ
れてゐる原文及び研究成果によつて概要を知ることが出
来る。それによると原文は、最初と最後が少し長行で、
内容のすべてが七言の偈頌で書かれてゐるらしい。その
論述は

① rkyan-pa 文字、すなはち前後や頭に添接して
ゐない場合の文字

② iphul-can 添接字、すなはち添前字 g, d, b,
m, ŋ の添接じり

③ ngo-can 有頭字、すなはち頭に文字が添接し
てゐる場合

といふ順序でなされてゐるようである。この論の主たる
目的はチベット獨特の綴字論を述べるにあり、従として
文法的内容を説くにある。その文法的の面はトンミの
「性入法」を以て裏附けて、以て綴字を論述しようとする
のである。故に「性入法」の偈がそのまゝ挿入せられ
て論述が進められてゐるのを見る。例へば前掲のラウフ
マーの論文五四〇—五四二頁に、Namas sambhoṭā-
ya (サンブホータに歸命する)といふ前おきに始まつて
「性入法」第一偈・第四—六偈・第一—一五偈を
殆んどそのまゝ引用して論じてゐるのが見られる。また
單に一語の綴字論のみに止まつてゐないといふことは、
連聲助辭を一々掲げて「連聲」に關して詳述してゐるの
を見て明らかなである。要するに、この書はトンミの
「性入法」に基いてそれを更に一段と布衍し、チベット
人さへ困難を感じるであらう複雑な綴字の問題を文法的
に規定し發展せしめたものであるといふことができる。
次に「具慧生歡喜」といふ文法書について考察を進め
なければならぬ。この書に關しては既に J. Schubert
に於て Tibetische Nationalgrammatik, Leipzig,

1937. なる詳細なる研究書が上梓されてゐる。この研究書にもいふ如く、奥書には北京の大ラマ Rol-pahi rdorje によつて集録刊行されたことが記されてゐるが、しかし、終り近くの第一五葉上に「シャル寺の lo-tsa-ba なる Dharma-pala-bhadra によつて説かれた」と見えるから法護賢の説を Grund として集録されたものと理解すべきである。故に法護賢の説を傳へるものと見做してよいわけである。そこでこの書の構成を見ると、前半がトンミの「三十頌」に對する解説であり、後半が「性入法」に對するものである。小さい型の市井版 (27×5 cm) で一七葉上で全部であるから極めて短いものである。それは一々註解してゐるのではなく、要點のみを例を擧げて簡明に説明してゐる。むしろトンミの本文なしに初學者にわかり易く文法の綱要を編纂したものであらう。自分の歸敬偈を以てはじまり、本文は長行で書かれてゐる。その内容を窺ふに、格を分類して七或は八としてゐる點が注意せられる。こゝに七とするのは主格を考慮に入れない場合をいふのである。なんとすれば、チベット語に於ては主格助辭がないからであつて、チベット語としては妥當な考へ方である。しかるにこゝに第八格について、「kyee (kye-kye)」といふ聲は第八格呼掛け

である^④といつてゐるのは妥當でない。それは「聲論」の下で既に述べたところであつて、この論もサンスクリットの考へ方が見られるのである。それは法護賢がインド文法學の學者であつたから、勢ひさうなつたのであらう。

このように、彼はインド文法學をチベットに紹介したのみならず、トンミ文法をわかり易く學ばしめるために簡明な綱要書を傳へ、且つ専門的な文法書として「ザマトク」なる綴字論を著した。現在チャンドラ・ダスの「チベット文典」中に收められてゐる Dag-byed gsal-bahi ne-tion (「明淨なる綴字の鏡」) と呼ばれる綴字論は、著者及び年代は未審であるけれども、恐らくこの「ザマトク」に據るところが大きいのではなからうか。

註① チョーマ「チベット語文法書」一八八頁。

② ラウファアの論文五七九頁以下。

③ シューベルトの研究書一九頁二下の三行目、七一頁註二七参照。

④ 同一一頁六上三行目。

五 シツの「三十・性入」註

さて我々は最も詳細を極めたシツ (Si-tu) の註釋書の

考察に入らう。この註釋の原文はチャンドラ・ダスの「チベット語文法書」の中に收められてゐる。それによると、

6 Si-tuhi sum [-cu-pa dan] rtags [-kyi hjug-pa]
「シツの三(十頌と)性(入法)」

といふ表題がついてゐる(シツ註と略稱する)。シツがこの註釋書を完成したのは奥書に、「ラブチェン第十二ミクマル甲子の歳」とあつて、それを青木文教氏は西紀一七四四年と算定してゐられるから、第十八世紀前半に於ける著作であらう。この書に關しては、遺憾ながら未だ翻譯も研究も發表されてゐない。

このシツ註は、表題の示す如く、トンミの「三十頌」「性入法」に對する註釋であつて、トンミの二書の表題・敬禮文・歸敬偈・本偈のすべてに亘り餘すところなく綿密に註釋を施したものである。しかし不思議なことは「性入法」の表題の解釋がない。ダスの文法書所收のものゝ、細かい活字を以てギッシリと組まれ大版(20×16.5 cm)で八八頁に及び、現存古典文法書中で最も大きいものである。その註釋の仕方は、トンミ文典の各偈について科段を設けて詳細に分類しつゝ、先づ逐語的に意味を解説し、次に昔からの異説あればそれを偈げ、或は異

説なくとも違つた考へ方をなされ易いと思はれるときはそれを示し、それらに對して微に入り細に亘つて論述し検討して、採用すべきものは之を採り、採用すべからざるものは極力之を破析するのである。またサンスクリットと比較して考へるのが適當であるときはコレスポンドを行つてその異同を明らかにして正しき理解を容易ならしめてゐる。昔の方法書の説をあげてゐる中で、最もよく引用してゐるのは前述のサキヤの「言語の門」とその註釋であり、實に十數回引いてゐる。また「八大處根本」とその註釋の「聲論」が三回、「ザマトク」が二回その名を發見し得る。また Sha-ju (-ba) が二回見られるが、これは恐らく前述の法護賢の系統のものを指すのであらう。またそのほか書名や人名と思はれる名が一回宛程見られるが、それらについてはよくわからない。また名を出さずに、「昔の註釋書」「或る註釋書」「或る人」などといふ表現で隨處に異説を掲げてゐる。更にまたインド文法書關係では、Candragomin のものが三回、Katantra が一回引用されてゐる。それは回数に於て少いけれども、インド文法にまで溯つて典據を求めた點に注意をすべきものがある。

このようにサンスクリットと比較してインド文法にま

で溯つてはゐるが、決してサンスクリットのな考へ方にとらはれず、それを脱却してチベット語本來のあり方へと進んでゐる。例へば「三十頌」第一七偈の呼掛けの聲を註釋して、「大抵の註釋書は、kye といふ聲を呼格であると許すけれども、(それは)ふさはしくなく」といつてゐる。先の「聲論」や「具慧生歡喜」の説を正しくないといふ意である。そして結論として、「kye, といふ(聲)は格ではなく、呼掛けを詮す聲であつて、サンスクリットの he, hno, hnos など^②に等しいと知るべきである」といふ。すなはちサンスクリットの間投詞と相應すべきであるとして、正しきコレスポンドをなして、チベット語本來の方向を明示しようとしてゐるのである。

以上要するに、彼は從來の文法書がサンスクリット的であつた點を脱却し、チベット語本來のすがたに於て正しく文法の體系を組織したのである。しかも異説の非を論破する場合は、極めて理論的である。理論的な體系づけを企てたところに彼の特色が見られる。ともあれトンミに始つた文法學が彼に於て集大成されたといつて過言ではない。したがつてチベット文法學史上、彼の功績は最も偉大なるものがある。

註① 「西藏文化の新研究」二一七頁。

② チヤンドラ・ダス「チベット文法書」所收のシツ註二四頁八行目。

③ 同二四頁一二行目。

六 善巧成就の「三十・性入」註

シツによつて完成されたチベット文法體系は、もはやそれ以上に超えることは出来なかつた。そこでシツ以後の文法家は、シツ以上に勝れた著作をするといふことよりも、詳細に過ぎ繁雜なるシツ註の要點を纏めて學び易くするといふ努力を拂ふ傾向となつた。その代表的なものの一にシツの弟子である正善巧成就 (Mikhas grub dam-pa) の著作がある。その題名は、

10 Sunn rtags gshun hchan legs-bgad nor-bu'i
phren-ba

「三十・性入本論善說寶鬘」といふ(以下善巧成就註と略稱する)。この原文及びそのフランス譯及び詳細なる脚註がベコーによつて完成せられ、Les Stokas Grammaticaux de Thonmi Sam-bhota. Paris, 1928. として刊行されてゐる。チベット語古典研究書として未だこれの右に出づるものなく、實に劃期的な力作である。

さてこの善巧成就註は、シツ註を數分の一に程よく纏めたもので、長さに於て最も短い「具慧生歡喜」と長いシツ註との中間に位するものである。この註は、トンミの敬禮文や歸敬偈に對する註釋を施してゐない。たゞ本偈のみに對する註解であつて、しかも本偈を掲げず註釋の文の中に含めてゐる。ベューの研究書中の原文は本偈の語句の下にラインを附してあるから、本偈が掲げられてなくとも明瞭に知られる。またシツ註に於ける詳細なる科段の分類を全く省き、本偈の順にしたがつて科段なしに註釋を施してゐる。この註の主張するところは、全くシツ註に同じである。恐らく師の説を忠實に繼承して、それを簡明に纏めるにあつたのであらう。

七 法賢の「シツの講義」

シツ註の摘要書を作る傾向に於て、善巧成就註と、その長さに於ても匹敵するものに法賢 (Dharma-bhadra) の著作がある。この原文もチャンドラ・ダスの「チベツト語文法書」の中に收められてゐる。それによるとその題名は

11 Si-tuhi shal-lun 「シツの講義」

とある (以下法賢註と略稱する)。すなはちシツ註を摘

要した講義である。法賢について、ダスによると High Priest of the Monastery of Gandan-tse, in Tsang. と説明されてゐる以外、その年代も如何なる人なるかも私は知らない。

その内容を見ると、先づ自分の歸敬偈に始まり、トンミの「三十頌」の題名の解釋、敬禮文及び歸敬偈に對する解釋があり、ついで「三十頌」と「性入法」の本偈に對する註釋に入つてゐる。トンミの本偈を掲出し、科段を設けて註釋して行く仕方はシツ偈と同一である。また「性入法」の題名の解釋がないのもシツ註と同様である。その文章は、シツ註よりそのまゝ拔萃した部分が多い。しかるにこの註釋に於て注意を惹くことは、「三十頌」第二二偈及び「性入法」第一七偈に對する解釋がシツ註と異つてゐるといふことである。この點に於て、先の善巧成就註がシツ註を忠實に繼承してゐるのに對し、この法賢註は必ずしもシツ註に従つてゐないといふ興味ある對照が見られるのである。そのことに關しては最後の結論に於て述べることにしてこゝでは省略するが、彼は善巧成就の如くシツと師弟の關係であつたのではなからうから、公平な立場に立つて昔の説とシツの説とを取捨選擇しようとしたのであらう。彼のこの立場は、我々

が異説間の諸論争を批判する上に於て興味あるものを示してくれるのである。そういふ意味に於て、この註釋の價値が見られるべきである。

八 音成就の「三十頌及び性入法」

最後に、我々は音成就金剛 (Dbyaṅs-can grub-paṅi rdo-riṅ) の著作を注意せねばならない。それは

12 Sum-cu-pa dan rtags-kyi hjuṅ-pa

「三十頌及び性入法」

と名づけられるものである(以下音成就註と略稱する)。その原文は Tibetan Grammar (Tibetan Primer Series No. IV), Calcutta, 1893. として刊行せられ、また Second Edition として一九二四年に Darjeeling からも出されてゐるらしいが、不幸にして私は何れをも入手してゐない。これに對してシェーベルトは、Tibetische Nationalgrammatik として Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen zu Berlin, Jg. 31 (1928), 32 (1929) の二回に亘り譯註を發表してゐるが、これも未だ見る機に恵まれない。しかし故井原徹山氏によつて佛敎研究第六卷一號(昭和十七年)第七卷一號(十八年)に邦譯註が發表せられてゐる。それによつ

て紹介すれば、「三十頌」「性入法」に對する簡明な綱要書であるといふ點に於て、前述の「具慧生歡喜」と軌を一にするものである。長さはそれより少し長く例も多い。「具慧生歡喜」が長行であるに反し、これは偈頌を以て書かれ、「三十頌」の方は七言の句九〇より、「性入法」の方は七言の句二五八より構成せられてゐる。たゞ「三十頌」の方の例證のみは長行を以て書かれ隨處に挿入せられてゐるが、「性入法」の方は例を偈の中に入れてゐるから偈數が多い。兩方のはじめに夫々自作の敬禮文及び歸敬偈がつけられ最後に長行の奥書が附せられてゐる。著者の音成就金剛についてその年代など井原氏の譯註に何ら紹介せられてゐない。恐らくわからないのであらう。年代が不明であれば、上來述べた諸文法書中のどこにおくべきであらうか。内容よりいへば、その所説が前の法賢註のそれに最も近いから相當後代のものになからうかと思ふ。

結 論

以上十二の古典文法書について大略年代順にその概要を考察したつた。まだこれらのほかにも文法書乃至は言語學關係のものが著作せられてゐるらしいが、近代的な

書物の形式で刊行されるに至つてゐないために入手が困難である。しかし以上のものを代表的なものと考へて一應満足するならば、これらの文法書が後代になるにしたがつて、どのように發達してゐるかといふ發達經過と、それに伴つて當然生ずる主張相異による文法學上の系統を確かめておきたいと思ふ。

先づ發達過程をたどると、既に上來聊か述べた如く、「聲論」や「具慧生歡喜」に於ては、*kye* を第八格とした。それは明らかにサンスクリットのな考へ方である。これに對しシツは格と見做さず間投詞であるとしてチベット語本來のあり方を強調した。次に更に、*phyag-hsthal-ba* (歸命する)といふ動詞は何格の目的語を伴ふと理解すべきであるかといふ問題をとり上げよう。「聲論」の前半後半ともに爲格を伴ふと主張する。その理由として「聲論」の前半の部に、「木のために水を引くのも木が大きくなつて成熟せんがためであつて、意味からいつて水を引く作者のためになる。歸命するのも意味からいつて歸命する作者のためになるから第四爲格の義となる」^①と主張する。これはサンスクリットの *namah* が通常爲格を伴ふことよりして、チベット語に於てもそれと一致せしめようとしての解釋である。しかるにシツ註

は、この「聲論」の所説を引用してそれに對して反駁してゐる。「若し作者自身のためにするから爲格助辭を伴ふと許すならば、

byan-pas phyugs gsod (屠殺者は家畜を殺す)。

といふ場合に、殺す作者のためにするのであるから家畜に爲格助辭を添接しなければならぬことになる。また *spra-po-la zan spyin* (乞食に食物を與へる)。

といふ場合に、與へる作者は自分のためにならぬから與へる對象の乞食に爲格助辭を添接してはならないといふことになる。兩者ともに過失であつて文法書の何處にもこのような説を見ないから許すことは出来ない^②と難じてゐる。シツのいはんとするところは、チベット語に於ては動作を差し向ける對象が利益を得るときのみ爲格助辭を伴ふと解釋する。歸命するといふ動作は歸命する作者自身のためになるかも知れないが、決して歸命する對象にとつて利益にならないから、このときは爲格ではなく業格助辭を伴ふと解釋する。すなはちサンスクリットの *namah* と同一に考へてはならないとし、チベット独自の文法を樹立しようとしてゐるのである。この問題をもう一步進んで考へるならば、チベット語に於ては爲格助辭として別な助辭があるわけでないから、利益云々

にこだわらず、すべて動作の対象に添接するものを業格助辭と見做す方がチベット語として一層妥當である。爲格を考へることが既にサンスクリットの語である。しかしシツはそこまでの獨目性を考へなかつた。それはチベット文法家として侵すべからざるトンミの「三十頌」第八偈に「義助辭が爲格のはたらきあることを明示してゐるからであり、またインド文法の影響を全く脱すること出来なかつたからであらう。しかしシツが極力チベット語本來のあり方に進もうとしたことは否定出来ない。インド文法學を輸入し模倣してつくられた初期から中期の文法書がサンスクリット的であつたことは當然である。それが次第にチベット語独自のあり方に於て自覺せられ、遂にシツに於てチベット語らしい文法學が大成せられるに至つたのである。

次に諸説の系統を研討しよう。「三十頌」第二二偈をめぐつて四説があり、興味ある論争が行はれてゐるが、それについては既に「印度學佛教學研究」創刊號に述べたから、こゝでは省略して直ちに結論に移ることにする。サキヤ系とプトン系は實際的な立場に立ち、それに對してシツ系は理論的な立場に立つてゐる。この二つの立場に直面した法賢は取捨選擇の立場をとつた。法賢が

自説を論證するに當つて Candragomin のインド文典より引證して自らを權威づけようとしたことは驚くべきことである。しかしその引證は正しいとはいへないから、やはりシツを超えることは不可能であつた。更にまた「性入法」第一七偈の解釋についてみるに、「具慧生歡喜」の所説は非常に不完全で理解し難い。シツは全然その説を採らず、全く異つた詳細なる解釋を施した。法賢はシツ註を採用したけれども、シツ註が無相中性に入れてゐる。再添後字を有するものを變化中性に入れた。

再添後字に強勢を表はすからシツの如く無相中性とせず法賢の如く變化中性とする方が適當であらう。しかしそれは極めて些細なことでも重要な問題ではない。とにかく法賢は何れの立場にも屬せず公平な態度を以て妥當な説を立てようとした。しかしそれは成功したとはいへない。この法賢説と一致するものが音成就註であつて、同一系統であらうか。これらの各系統は學派といふ如きものに形成せられるまでには至らなかつたが、諸説を生じて發達して行つたことは注目に價するものがある。

最後に、これらの諸説の中で何れがトンミの意趣に合致してゐるであらうかといふことを考へたい。トンミの文法書を一見して氣づくことはそれが極めて理論的であ

り、特に「性入法」に於て性の分類をして規定して行く仕方には、そこに一分の隙もなく、よく理論的な文法を組織しようと思はれる程に理論的なものである。その點よりいつてシツの理論的な鋭さはトンミの意圖に合致するものと考へてよい。シツは、實際的實用的な文法に墮しつゝあるチベット文法を、理論的な文法を組織して往古へ引きもどし正しい文章語としてのチベット語に還らうとする復古主義者であつた。トンミに始まつたチベット文法學がシツによつて正しく完成された點に於て、最初のトンミとその完成者シツの功績の偉大なるものがある。たゞその反面に於て、チベットの文法學者がトンミを尊崇する餘り彼の文法書を金科玉條とし、「八大處根本」と「聲論」には考慮を拂はず、トンミ文法以外の分野の研究を行はなかつたことは遺憾である。

以上、古典チベット文法書を概觀し、その發達概要を述べた。それは、インドに於て隆盛を極めたサンスクリット文法學の發達には、とうてい比肩し得べくもない。しかしその模倣に始まつたチベット文法學が、次第に自國語本來のあり方を樹立して行つたのである。それは實に永い間に亘るチベット文法學者たちの絶えざる努

力によつたものである。我々はその努力を輕んじてはならないであらう。

註① 北京版論部一二函五一一下。

② チャンドラ・ダス・チベット語文法書」所收のシツ註四頁一行目以下。

③ 拙稿「西藏文法學に於ける印度文法引證の一例」(印度學佛教學研究第一卷一號八〇頁)に詳細に論述したから参照を乞ふ。

④ シューベルト前掲書二三頁一三上三一五行。

石濱純太郎先生より資料を貸與し指導していただいたことに對して謹んで感謝の意を表す。

(本稿は昭和二十七年度文部省科學研究助成金による研究成果の一部である)